

「伊勢御師に関する文書を読む」解説

1 資料の文書群について

野中家と野中家文書について

野中家：関東管領上杉憲政に仕えていた野中備前守の弟の野中帯刀という人が始祖とされている。憲政の越後逃走後、野中帯刀は彦兵衛と改称し、武州幡羅郡中奈良村(現熊谷市)に居住した。以後中奈良村の開発農民として代々重きをなし、名主・目付・組合大惣代などを歴任し、明治以降も村政の中心にあった。

野中家文書：総数 12000 点を超える文書群。近世文書が多数を占め、助郷、堰関係、水利・治水に関する文書が多い。また、「蔵書の家」としても機能していたため典籍も多数ある。

森田家と森田家文書について

森田家：松山城主上田氏の家臣の森田将監行家(没年：寛永 7 年(1630))を祖としている。近世初頭から大野村に住み、代々名主、百姓代を務めた。近代になってからは都幾川村(現ときがわ町)長などとして村政の中心的な役割を果たすとともに村の発展に大きく寄与した。

森田家文書：総数 8000 点を超える文書群。年貢関係、支配関係、村政関係、戸口関係がまとまっている。特に、大野村から江戸城へ献上していた御用炭の関係文書群が特徴的である。

2 伊勢参宮の流行と伊勢御師の活動

◎江戸時代の伊勢参宮

- ・江戸時代中後期には旅が活発化、中でも多くの人々が訪れたのは伊勢神宮。
- ☞一生に一度は伊勢参宮をしたいという思いがあったため。
- ・抜け参り、おかげ参りなど特殊な参宮も見られた。
- 伊勢神宮と人々を繋ぐ役割を果たしたのが御師。

◎御師とは

- ・特定の社寺に所属して、その社寺へ参詣者を導き、祈祷・宿泊などを取り計らう者。御祈祷師という呼び名が縮まったのが由来とされる。
- ・当初は寺院の僧侶や先達の名称だったが、熊野三山や伊勢神宮などにも広ま

り、神職のことも指すようになった。

- ・伊勢神宮では古くから天皇以外が私的に幣帛をささげることが禁じられてきた(私幣禁断)が、庶民の崇敬が高まるにつれて、個人的な祈祷やお礼参りの要求が生じるとともに伊勢神宮の御師の活動が盛んになった。

◎伊勢御師の活動

◇各地への配札

- ・毎年暮れ近くに各地の檀家を回り、大麻^{たいま}を配って歩いた。
 - 大麻：伊勢神宮で配布する神札。お祓大麻をのし形に包んだ剣先祓が多く、丁重なものは箱に収めて配った。
- ・大麻とともに伊勢土産をつけることが多かった。
 - 例：伊勢暦、帯、茶、伊勢白粉、海苔など。
 - 伊勢暦は農事に関わる記述や日々の吉凶が記されており、重宝された。
 - 嘉例状という挨拶状を渡すこともあった。
- 御師が全国へと赴いたことにより伊勢信仰が広まり、参宮者の増加にも貢献した。

◇参宮者の宿泊

- ・御師は参宮に来た人々を自邸に宿泊させることが慣例だった。
 - 下記のような盛大なもてなしをしていたとされる。
 - 茶屋が立ち並ぶところまで参宮者を迎えに行って自邸まで案内する。
 - 伊勢海老や鯛などをふんだんに使った豪華な料理を出す。
 - 伊勢神宮を案内する(駕籠を手配することもあった)。
 - 屋敷の神楽殿で神前に神楽を奉納する。

3 伊勢御師 三日市大夫について

三日市大夫：外宮御師の代表的な人物。

祖先：遠祖は橘諸兄で、奥州の藤原秀衡の庶流より出ているとされる。

秀衡の舎弟の伊達次郎秀最という人物が伊勢で参籠所の跡継ぎがない時にその家を継ぎ、三日市大夫次郎秀と称したのが祖先とされる。(『神都名家集』73頁～74頁参照。所説あり。) 師職の格は皇大神宮権禰宜正四位。

- ・配札の対象は、明治12年の調査では旧大名18戸、旧旗本300戸、他東日本を中心にほぼ全国にわたる地域の人々であった。特に関東奥羽地方の割合が

高かった。(皇学館大学史料編纂所編『神宮御師資料 外宮編 3』39頁～42頁参照。)

- ・参宮者を止宿させるなどしていた屋敷が大規模であったとされ、「宇治山田市大字岩淵町百貳番地土地物件ニ関スル調書附属図面」からの復元によると敷地は間口約55m、総面積約1800坪、総床面積約800坪に及び、客室棟5棟、神楽棟(神楽殿・広間)、台所棟、住宅棟、付属棟(蔵・門・納屋など)から構成されていたとみられる。

現在では屋敷跡地の碑のみが残っている。

〈参考〉



三日市大夫次郎邸宅の図。明治35年頃の様子か。(「伊勢両宮日月参大々神楽優待会員名簿」西川家文書No.883-3)

4 用語解説

- ・一筆啓上：男子が書状の初めに書いた慣用語。
- ・堅勝(健勝)：からだに悪いところがなく健康なこと。また、そのさま。多く「御健勝」の形で相手の健康についていう。
- ・珍重：めでたいこと。祝うべきこと。結構なこと。また、そのさま。
- ・仕合：物事のやり方、または、いきさつ。事の次第。始末。

- ・恐惶謹言：つつしんで申し上げることの意。特に、書状などの末尾に書止めとして記して敬意を表わす文言。
- ・砌：あることの行なわれる、または存在する時。そのころ。
- ・奉賀：祝い申しあげること。つつしんで祝うこと。また、賀状を奉呈すること。
- ・出役：役目のために出張すること。また、その役人。
- ・鶴声：(御鶴声で)相手を敬って、そのことばをいう語。主に手紙などで用いる。

5 史料の要約

【資料8】

伊勢御師である三日市大夫次郎からの、野中彦兵衛の母ほのが先ごろ伊勢参宮をしたことへの御礼状。首尾よく礼拝が済んだこと、道中無事に帰国したことを喜び、再び参宮されることをお待ちしていますと締めくくっている。

【資料9】

伊勢御師三日市大夫次郎の手代である村井藤吉郎から森田常右衛門へ出された書状。昨年森田家で年越ししたことへの御礼と、当年も出張するが回村は多忙のため、手代を差し遣わすことが述べられている。また、(手代の回村の際に)大夫次郎の歌1枚を、粗品を添えて差上げるので、お納めくださいと添えられている。

参考文献

- ・皇学館大学史料編纂所編『神宮御師資料—外宮編3—』皇学館大学出版部、1985年。
- ・埼玉県立文書館編『近世史料所在調査報告7 野中家・新井家文書目録』埼玉県立文書館、1984年。
- ・埼玉県立文書館編『近世史料所在調査報告18 森田家・野口家文書目録』埼玉県立文書館、1982年。
- ・埼玉県立文書館編『収蔵文書目録第58集 諸家文書目録X』埼玉県立文書館、2020年。
- ・建築監修：菅原洋一、復元：大林組プロジェクトチーム「伊勢信仰のシンボリックな建築 御師『三日市大夫次郎』邸の想定復元」『季刊大林 No.43 御師』、株式会社大林組、1998年。
- ・三谷敏一『神都名家集』、1901年。